

メキシコ第3の性＝ムシエについて

青 砥 清 一

1. はじめに

メキシコ南部オアハカ州、テワンテベック地峡の太平洋岸に位置するフチタン市には、「ムシエ」(muxe)と呼ばれる人々が暮らしている。ムシエは、生物学的に男性として生まれ、社会的に女性の役割をもつ「第3の性」と言われる。かねてより世界中の社会学者から注目を受けてきたが、わが国でも2015年にNHK BSプレミアムの番組¹で報じられ、広く人の知るところとなった。

本稿では、ムシエの生きるサポテカ族の社会と世界観を概観し、ムシエがその社会でどう受け容れられ、ムシエ同士で連帯し、フチタンの外でどのような差別を受けているか見ていく。そして最後に、ムシエと同性婚の問題について考えたい。

2. サポテカ族の母系制社会

ムシエの居住するフチタン・デ・サラゴサ市は、総人口8万6千人のうち7万4千人がサポテカ族などの先住民系住民で占められる。オアハカ州は、首都メキシコシティから370キロほど離れた遠方に位置し、植民地時代は森林が多く農業に適さない土地であったため、スペイン人による入植があまり進まなかった。それゆえ、いまでも先住民文化が色濃く残っている。

フチタンのサポテカ族社会は、伝統的に母系家族制である。この地域の女性は、幼いうちから母親から仕事と家事のイロハを叩き込まれて育つ。男性が農業、漁業、狩猟、金銀細工、陶芸などに従事する一方、女性は縫物、調理、美容、小売などで収入を得て、家計と家事を管理する。

メソアメリカ先住民の民族衣装「ウィビル」は、長方形の織物を縫い合わせて作られた、彩り豊かな貫頭衣で、部族や地域により紋様と形状が異なる。主に女性が普段着や晴れ着として

着用する。都市民や観光客向けにも製造・販売されており、先住民族の主要な収入源である。経済的な利益もさることながら、伝統の製法を受け継ぐ女性の役割は、民族的アイデンティティーを保持する上でも重要である。

フチタンにはサポテカ女性による手工芸品、食料品などの生産・加工から販売・消費までの域内流通があり、地域のなかで財が循環する。この地域経済は郷土固有の知恵と高度な工芸技術により支えられているが、それらも女性たちの間で守られている。

サポテカ族には、「気前の良さ」が名声につながるという互酬的な贈与文化がある。コミュニティの祭り「ペラ」(スペイン語で「夜明け、ろうそく」の意)の元締め(mayordoma)となり、私財を投じて人々にご馳走を振る舞うことは、サポテカ女性にとって名誉である(Bennholdt-Thomsen, 1996, pp.80-83)。そこには饗応の祭りを通じて富を再分配し、貧富の格差を縮める経済システムがある。

このような社会で中心的役割を担い、サポテカ族の伝統文化を継承する母親の姿は、子供たちにとって憧憬と尊敬の的であり、そしてムシエとしてカミングアウトする少年たちに勇気と希望を与える。

3. 第3の性

ムシエは、ジェンダーを研究する社会学者の間で注目されてきた。ジェンダーとは、社会的・文化的につくられた性であり、固定的役割分担や生物学的決定論の制約から女性を解放するため、性をセックス(解剖学的・生物学的な性)の次元から切り離して考える立場から、1970年代に発見された概念である。この考え方によれば、生物学的な性が基盤となって文化的・社会的な性が構築されるという基盤主義は否定される。ジェンダー論者は、男女を分けることが

「男>女」という権力構造の温床になるとして、男と女という二分法を問題視し、「第 3 の性」の可能性を追求する。そして、社会・経済・文化・家族などを支える法制度そのものに内在する偏向を構造的に捉え、抑圧のない関係性を求める。

サポテカのムシエは、上述した母系制社会において女性と同様の社会的役割を担う。性自認は男性でも女性でもなく、さりとてゲイとも異なり、あくまで「ムシエ」として自己を同定する。現代のムシエを代表する社会人類学者・人権活動家、アマランタ・ゴメス・レガラド博士²は、「ムシエとはトランスジェンダーに類似するが、独自の性質をもつ。その独自性とは、内なるエゴと、固有の文化背景をもつ社会構造の上に存立する」(Gómez Regalado, 2016, p.18, 拙訳)と表現する。すなわちムシエとは、体と心の性の一致しないトランスジェンダーという本人自身のもつ内的な要素と、サポテカ母系制社会における女性優位という外的な要素によって構成されるのである。

ところで、メキシコ国民の共通語であるスペイン語には、文法上の性 (géneros) がある。例えば定冠詞は、男性形が単数 *el* と複数 *los* で、女性形が単数 *la* と複数 *las* である。定冠詞が生物名詞と共に起るとき、女性複数形 *las* は全員が女性・雌だけからなる集合を指示するときにはしか用いられないが、男性複数形 *los* は男性・雄だけの集合のみならず、男女・雄雌が混在するときにも用いられる。「サポテカ族」を例に挙げると、たとえ女性を含んでいても男性複数形で *los zapotecos* と表現する。したがってスペイン語は、文法の上では男性優位といえる。その一方、現代スペイン語では、定冠詞の女性複数形を前に置いた *las y los zapotecos* (*y* は等位接続詞) という表現形式もみられる。この定冠詞の *las y los* 用法は、伝統的な規範文法に反するが、昨今さまざまな言語使用場面において広く用いられており、特にジェンダーへの配慮が強く要求される公報や法文などにおいて好まれる。スペイン王立アカデミーの現代スペイン語参照コーパス CREA で検索をした結果、1980 年代からスペインおよびラテンアメリカで使用

されていることが確認された³。

その一方、サポテカ語⁴には文法上の性がない。例えば、人称代名詞の三人称単数形には *laa* という基本形があり、特に人を指すときには *laabe*、その他の生物には *laame*、無生物には *laani* という特別な語形もあるが、これらに男女の区別はなく、「彼」であれ「彼女」であれ指示対象が「人」であれば *laabe* や *laa* を用いる (Pickett, Black & Marcial Cerqueda, 2001, p.28)。尤も、文法的性がないからといって、サポテカ族が生物上の性を認識しないということではなく、*nguiiu*「男性」と *gunaa*「女性」、*bioze*「父親」と *jñaa*「母親」といった語彙の対立は存在する。また、名詞 *huiini'* は「子ども」を意味するが、これを形容詞 *dxaapa'*「女性の」で修飾すると「女の子」*dxaapahuiini'* になる (Pickett, Black & Marcial Cerqueda, 2001, p.17)。

ところが、名詞 *xheela'* は「夫」と「妻」の意味をもち、男女の性を弁別しない。つまり、「パートナー」や「配偶者」といった生物学的性を意味要素に含まない語に相当する。サポテカ族の夫婦において男女の二項対立が言語上表現されず、夫婦を指示する語が同一であるならば、かつてムシエとそのパートナーも男女のペアと同様に *xheela'* と呼ばれていたはずである。そもそも「ムシエ」という名詞自体がスペイン語の *mujer*「女」(16 世紀以前の古い発音で [mušér] (ムシェール)) に由来するという事実から明らかのように、これはスペイン人がアメリカ大陸に到達した後に生まれた名詞である。かつて同性愛が特別な事でもなかった先コロンブス期のメソアメリカにおいて、ムシエは男や女と同様に人称代名詞 *laabe* で指示され、婚姻関係においては *xheela'* で呼ばれていた。その点でいうと、ジェンダー研究者の提唱する「第 3 の性」という概念もまたヨーロッパ的な性の二分法から派生したものであるから、本来サポテカ族からすればさほど大きな意味をもたないのかもしれない。ムシエがフチタン社会で自然に受け容れているのは、こうしたサポテカ族の世界観が背景にあると思われる。

4. ムシエに寛容なサポテカ社会

フチタンでは人口の6%ほどがムシエであると推測される (Animal Político, 2017)。参考までに、OECD 加盟国のうち統計データの入手可能な 14 ヶ国において LGBT を自認する人の割合は、成人人口の 2.7% (OECD, 2019) である。統計のデータ元が異なるため一概に比較することはできないが、ムシエの割合は相当高いとみてよい。それだけフチタンという土地がムシエを受け容れ、ムシエ自身もカミングアウトしやすい社会なのだといえる。以下、ムシエの伝統的慣習と現状を概観し、フチタンにおいていかに受容されているか見ていきたい。

はじめにムシエの身なりは、典型的に長髪で、化粧を施し、婦人の服を着用する。サポテカの女性もムシエも豊満な肉体の持ち主が多いため、女装したムシエは一見しただけではなかなか女性と見分けがつかない。その一方、本人の趣向や職業上の制約などの理由から、男性の一般的な服装・髪型と変わらないムシエもある。だが、顔の表情や話し方で、言われずともそれとなくムシエと分かる。

ムシエの恋愛相手は概して男性であるが、なかには女性と交際する者や、男性とも女性とも交わるバイセクシャル、あるいは、ムシエ同士と関係をもつ者さえいる。メキシコの街中でよく見るカップルのように、人目を憚らず愛情表現をするムシエの姿を目にするが、一人の男性だけに束縛され、マチスモに服従して自由を奪われるのは、ムシエのプライドが許さない。そうしたムシエたちの深く堂々とした振舞い、誇り高い生き様、そしてエロスと影を漂わせる行まいは、世界中の芸術家、写真家、作家たちを惹きつけてきた。

伝統的なムシエの仕事は、一般のサポテカ女性と同様、ウィピル、トトポ (トウモロコシでできた大きめの薄焼パン)、タマル (トウモロコシのちまき)、アトレ (トウモロコシの飲み物) などを作り、市場や商店などで売ることである。美容師も代表的なムシエの職業である。近年は、会社経営者、会計士、公務員、教師、デザイナー、俳優など、ムシエの職業が多様化している。

情報通信技術と教育の普及により、若いムシエたちの間に伝統的な職業に就くことを避ける傾向が見られるなか、新世代のムシエ、エルビス・ゲラ氏は、インターネットを利用し、自作のウィピルを海外の顧客に販売する傍ら、詩人・翻訳家として創作活動を展開している (Gobierno de México, 2019)。伝統的にフチタンでは、詩や音楽といった芸術や芸能は、基本的に男性のする「軽い仕事」とみなされてきたので、本来ならば女性の「重い仕事」を担うべきムシエが従事するような職業ではない。しかし同氏は、伝統的な慣行に囚われず、ムシエの新たな可能性を切り拓いている。

家族のなかに同性愛者がいることに抵抗感を覚えるメキシコ人は少なくないが、フチタンでもあらゆる家庭でムシエが歓迎されるわけではない。とりわけ父親から強く反対されることが屢々ある。しかし、多くの家庭では息子がムシエであると分かると祝福し、近隣住民もその子を応援するという。というのは、サポテカ族は家族思いであり、たとえ息子がムシエであっても家族の一員として尊重し、そして「ムシエが神によってそのように創造された」のだから「ムシエにも自分らしく生きる権利がある」 (Mirandé, 2017, p.69) と考えるからである。また、ムシエが女性のように一家の稼ぎ頭として経済的利益をもたらす上、生涯親元で暮らし、老いた親の面倒をみるのが期待されるという、実利的な理由も挙げられる。たしかにムシエのなかには親元を離れて男性と同棲や結婚をしたり、ムシエ同士で共同生活を営んだり、あるいは女性と結婚して子供を儲けたりする者もいるが、ムシエは家族や近隣住民に愛され、なおかつムシエ同士のソーシャルネットワークも強いので、わざわざ見知らぬ土地で不当な差別を受けてまでフチタンを離れるメリットは薄い。

最後に、フチタンでは、教義で同性愛を禁ずるカトリック教会さえもムシエを容認している。ムシエに教会堂への出入りを認め、ムシエのためにミサを行うのである。信仰の上でも受容されていることは、ムシエにとって大きな心の支えであろう。

5. ムシエの連帯

ムシエ同士の社会的な結び付きは強い。平日は仕事と家事に勤しむムシエたちも、週末ともなれば皆で集まり、宴を設け、恋愛や仕事などの話題で盛り上がる。地震などの災害時には、被災した住民のため、一致団結して食事の提供、瓦礫の撤去などの支援活動を行う。サポテカ女性の甲斐性と生来男性の体力を兼ね備えるムシエは、地域社会にとって頼もしい存在である。

ムシエの祭典『La Vela de las Auténticas Intrépidas Buscadoras de Peligro』（真に無謀な危険の探求者達の祭り）は、1975 年、ムシエの社会的地位を向上させる目的のもと始められた。フチタンで毎年 11 月に開催され、今年で 44 回目となる（2017 年はチアパス地震の影響により中止）。2013 年にはロサンゼルス、2014 年にはメキシコシティでも催され、メキシコの性的多様性を象徴するイベントとなっている。

ムシエは前夜祭で地域の子供たちにアメやおもちゃを配るのが慣わしである。祭りが始まると、色彩豊かな民族衣装を身にまとい、市中を練り歩く。ムシエにとって年に一度の暗れ舞台、そして相互の連帯を深める絶好の機会である。フチタンの一般市民も、市外から訪れてくる見物客も、ムシエとともに夜を徹して歌い踊る。祭りのハイライトは、ムシエの女王コンテストである。審査基準は外見の美しさだけでなく、社会貢献も評価される。コンテストで女王に選ばれることは、ムシエにとって最高の栄誉である。

世界的に珍しいこの祭りは、国内外から多くの観光客を呼び、フチタンの新たな観光資源となっている。性的多様性の尊重が社会の活力になる好例といえよう⁵。

6. ムシエへの差別

「ムシエの天国」と謳われ、ムシエに寛容なフチタンであっても、誰もが諸手を挙げてムシエを認めているわけではない。マチスモ⁶に由来する差別や偏見、カトリック信者の反発、ホモフォビアが歴然と残っている。

ムシエに対する差別的待遇がより深刻なのは、医療と公的保険の分野である。病院では医

師から診療を拒まれ、職場では社会保険の加入を断られる。

また、ムシエは同居する親から老後の保障のようにみなされ、家からの独立を妨げられるケースさえある。このことは、ムシエの社会進出を阻む一因ともなっている。

このような差別的扱いを解消し、ムシエの人権を保護するための運動が活発に展開されている一方、それに反対するホモフォビアが過激化している。今年 5 月、メキシコ国家差別予防委員を務めるオスカル・カルソラ氏（享年 68 歳）がサント・ドミンゴ・テワンテペック市の自宅で殺害された。無惨にも、20 発を超える殴打を受けた上、心臓を刺され、血まみれの遺体となって発見された。同氏は、性的差別とホモフォビアを撲滅するため、40 年以上前から発起人として上記祭典の実現に大きく貢献した一人である。それゆえ、この事件はフチタン市民に大きな衝撃と深い悲しみを与えた。

メキシコでは 1995 年から 2015 年までの 20 年間で、ホモフォビアを動機とする殺人事件が約 1,300 件発生した。2018 年に実施された性的指向・性的アイデンティティーに関するアンケート調査では、53%の性的マイノリティーがヘイトスピーチ、暴行、ハラスメントを受けた経験があると回答している。近年、進学や就職のためフチタンを離れるムシエが増えているなか、移転先の学校や職場で女装を罵られるなどの侮辱を受け、性別変更の認定を申請するケースが目立っている。

性的マイノリティーを狙った犯罪のほかにも、女性差別や女性蔑視を理由に男性が女性を殺害する行為、いわゆるフェミニシディオ（feminicidio）もまた深刻な社会問題である。これらの性犯罪を未然に防止するため、国を挙げた抜本的な取り組みが求められる。

7. ムシエと同性婚

メキシコでは 9 割以上の国民がカトリック教徒である。カトリック教会は、古来より同性愛を「悪徳」「罪」とみなしてきた。政治と宗教が未分離であった時代、キリスト教諸国において同性愛は刑罰の対象でさえあった。

13 世紀カスティーリャ＝レオン王国のアルフォンソ 10 世賢王により編纂され、ラテンアメリカにおいてもスペイン植民地時代に主要な法源の一つに位置付けられた『七部法典』（第七部第二章法一・二）は、旧約聖書の創世記に登場する都市、ソドムとゴモラの滅びを引用し、ソドミーが神罰をもたらし、実行犯および共犯者の名誉を穢す罪であるとした上で、自然の摂理に反して故意に男色の罪を犯した者は死刑に処すると規定する（青砥・相澤，2019，p.286）。

16 世紀スペイン人のメキシコ征服活動を記録したベルナル・ディアス・デル・カスティーリョは著書『メキシコ征服記』のなかで、「あの忌まわしき儀式において獲得する女性の服を日常的に着用している男子がいるので、ソドミーを除去しなければならない」（第 51 章、拙訳）と記している。「あの忌まわしき儀式」とは、メソアメリカで行われていた人身供儀を指す。スペイン人征服者たちは、人身供儀や偶像崇拜と並ぶ「悪習」として同性愛行為を根絶させるべく、先住民の同性愛者を異端審問にかけて処罰した。

現代においても同性愛に反対するカトリック教会の立場は基本的に変わっていない。カトリック教会は同性愛に対し、生殖を伴わないと非難する。就中、同性カップルが子育てをすることへの抵抗が強い。七秘蹟の一つである婚姻の目的が、男女が相互に助け合いながら神の祝福の下で子どもを産み育てること（日本カトリック司教協議会，2011，p.234）と定められているからである。

だが、そのような同性愛に関するカトリック教会の姿勢にも時代の潮流に合わせた変化が生じている。新しい公教要理では、「同性愛行為が人間の自由意志による逸脱した性の使用であって倫理的には認められない」としつつも、「同性愛についての軽率な判断は控えるべき」「現代の生殖医療科学によれば、生まれながらにして身体的にも心理的にも性別について悩んでいる人もいる」「そのような生来の心身の条件のために結婚できない人たちが、不当な差別を受けないように留意する必要」があると説いてい

る（日本カトリック司教協議会，2011，p.354）。

ローマ法王フランシスコ 1 世は、かつてブエノスアイレス大司教時代に同性婚の合法化に異を唱えてアルゼンチン政府と対立したが、2018 年、チリの聖職者らにより性的虐待を受けた被害者と面会した際、被害者自身から同性愛者だと告げられると、「それは問題ではない。神はあなたをこのようにつくり、このままのあなたを愛している」（CNN.co.jp，2018）と宣べたという。面会の背景に鑑みれば、被害者の心情を慮った発言とも読み取ることができるが、カトリック教会の頂点に立つ法王が同性愛を容認したとも受け取り得る発言をしたことは、教会の長い歴史において画期的な出来事であるといつてよい。

ローマ法王を筆頭にカトリック教会の持つ政治的・社会的な影響力は、いまだイペロアメリカ諸国において軽視することができない。だが、カトリック教会の反対を押し切り、政教分離原則を遵守して同性婚を容認した国々（スペイン、アルゼンチン、ブラジルなど）では、婚姻と生殖を切り離して考え、性的指向にかかわらず何人にも認められるべき基本的人権として、同性愛者にも婚姻権と養育権を認めている。欧米諸国では宗教的にも法的にも同性愛に対する禁圧の歴史が長く続いただけに、その反動は頗る大きく、21 世紀に入り同性婚の合法化が急速に進んだ。

メキシコでは、婚姻は各州の民法により規定される。メキシコシティが 2010 年に同性婚を容認したのを皮切りに、他の諸州でも同性カップルが裁判所にアンパロ（保護請求）を提起することにより同性婚を実質的に容認してきた。そしてついに 2016 年 5 月 17 日、連邦政府が同性婚の合法化を宣言するに至っている。

オアハカ州では、2017 年 3 月、合法化宣言後同州初となる同性婚が結ばれ、2019 年 7 月までに 19 組のカップルが誕生している。2019 年 8 月 28 日には、州議会において同性婚を容認するための民法改正法案が可決・成立した⁷。同性婚を保障するため民法を改正した州としては、オアハカがメキシコ全 32 州中 19 番目となる。

ところが、その同じオアハカ州に属するフチタン市では、合法化宣言後まだ一組も同性婚が成立していない。この現状にフチタン市長のエミリオ・モンテロ・ベレス氏は、「同性婚はフチタン市でも容認される。市は LGBTTI の権利を擁護する」(Istmo Press, 2019 [1]) と述べている。ムシエも合法化の恩恵を当然に享受することができるのに、なぜ同性婚に踏み切らないのか？

一つに、大都市圏よりもカトリック教会の影響力の強い地方では、長年にわたってメキシコ社会に定着してきたカトリック的な結婚観を直ちに变えることは容易でない。男性が保守的な価値観に基づく差別や非難を恐れて同性パートナーとの結婚を躊躇したり、家族から同性婚を反対されたりする。その他の理由としては、ムシエが生涯親元で暮らすよう求められること、精神的な自由を保持したいがゆえに敢えて法律婚を選択しないこと、一夫一婦制にあまりこだわっていないことなどが挙げられる。今後、法改正の効果がどのように現れるか注視したい。

8. 結び

本稿では、メキシコ第 3 の性と呼ばれる「ムシエ」の現状と問題点について考察した。生物学的に男性として生まれ、社会的に女性の役割をもつムシエは、サポテカ族の母系制社会のなかで女性と同様の役割を担い、家族や地域住民から受容されている。

サポテカの人々は、ムシエが身体の性に縛られず自分らしく生きることに対して寛容である。それは、家族を大切にしているサポテカ人の民族性に加え、先コロンブス期のメソアメリカにおいて同性愛が特別でなかったことや、サポテカ語において「人」を指示するときの人称代名詞等に性差がなく、夫婦を指示する語にも男女の区別がないといった民族固有の世界観が背景にあるように思われる。

特筆すべきこととして、従来より同性愛を否定してきたカトリック教会が、フチタンではムシエを否定せず、ありのまま認容している。生殖医療科学の進歩により新しい公教要理に性同一性障害者への配慮が盛り込まれたという時代

の流れを反映しているのであろうが、別の見方をすれば、これだけフチタン社会で受容されているムシエに対し、もしや教会が旧来の要理を厳格に適用して非難や否認をすれば、教区信者からの支持や信頼を失いかねず、畢竟、ムシエの存在を認めざるを得ない。

法制度に関しては、今日までメキシコは性的マイノリティーにとって比較的有利に法を改正してきた。その結果として、同国における性的マイノリティーの人権状況が以前よりも改善されているのは間違いない。同性婚が合法化されたほか、性別の取扱いの変更が外科手術を要件とせず行政手続きのみにより可能となった。ホンデュラスなど近隣の中米諸国で人権侵害を受けた性的マイノリティーが人道支援を求めてメキシコまで避難してくるほどである。

とはいえ、メキシコ社会にはマチスモやキリスト教的価値観からくる差別や偏見が根強く残っている。一旦フチタンの外に出れば、ムシエも他の性的マイノリティーと同様に不当な性差別を受けやすい。それどころか、近年ムシエの存在が国際的に広く知られるようになったことで、それに不満を抱くホモフォビアの輩から目の敵にされ、ムシエに対する暴力やハラスメントの事件が増加している。国家人権委員会 (CNDH) など関連当局による早急の対策が求められる。

そのほかにも、2016 年にメキシコ連邦政府が同性婚の合法化を宣言したにもかかわらず、フチタンではその効果がみられず、ムシエを含め、性的マイノリティーの間に同性婚が普及していないという課題も残っている。オアハカ州民法の改正により、今後は裁判所に保護請求を提起しなくとも州内での同性婚が可能になるが、法の実効性をいかに担保し、婚姻の自由を阻害する諸要因をどう解消していくかが州・連邦両政府に問われる。

このようにムシエの人権と安全はまだ十分に保障されておらず、問題が山積である。差別のない社会の実現を目指し、ムシエたちの闘いはこれからも続く。

【註】

- 1) 番組名『壇蜜 死とエロスの旅 マヤ・アステカ』。放映後、大きな反響を呼び、『死とエロスの旅』（壇蜜著、集英社）のタイトルで2019年に書籍化された。
- 2) 性的・民族的マイノリティーの権利保護、性教育支援、エイズ予防などに関する運動を展開する。メキシコ反ホモフォビア国家委員。2003年、若干25歳でメキシコ下院選に出馬し、同国初のトランスジェンダー立候補者として話題になった。
- 3) 検索時に las y los と組み合わせた語形は、profesores「教師」、estudiantes「学生」、profesionales「専門家・プロ選手」、senadores「上院議員」、escritores「作家」、ciudadanos「市民」および jóvenes「若者」。なお、最後の2語は Todos（全資料）や Periódico（新聞）の項目では検索結果件数が過剰と出たため、検索対象の言語資料を Revistas（雑誌）に限定した。
- 4) サポテク諸語は、主にオアハカ州で話されるサポテカ族の言語で、オト・マンゲ語族に属する。話者総数は約45万人。本稿ではフチタンで話される「地峡サポテク語」(Zapoteco del Istmo) を扱った。
- 5) ムシエの祭りの影響は、同じ州内の他の地域に波及している。サンタ・マリア・アツォンバ村では、2019年6月21日から23日までオアハカ中の芸術家が集い、第1回性的多様性フェスティバル「コンコルダンシア」（スペイン語で「調和」の意）が開催された。写真、絵画、彫刻の展示や、音楽、舞踊、演劇の上演などともに、性的アイデンティティーに関するカンファレンスが催され、性的マイノリティーの団結、表現の自由、LGBTTI コミュニティーの可視化などについて話し合われた。
- 6) 「マチスモ」(machismo) とは、ラテンアメリカのメスティソ社会における男性優位主義を意味し、「男らしさ」を重んじる生き方や価値観を表す。ヨーロッパ地中海世界において家族や社会的な名誉を担う男性を「男らしい」と重視する傾向がスペインからラテンアメリカに普及し、社会階層や民族的差異に基づいたジェンダー差別として定着したと考えられている。思うに、歴史的にメキシコのマチスモを制度的に支えてきたのは「エヒード」(ejido) という土地共有制度である。これは、中世スペインの村落にみられた入会地に由来するもので、メキシコ革命の精神を反映し、先住民コミュニティが返還された農地を共同で耕作するための法人格を認める制度である。法人を運営する総会は、伝統的に男性によって管理された。この制度の下、女性は土地所有から排除されてきた。なお、現在のエヒードは、農業目的に限定せず、居住地としての所有権も認める（メキシコ憲法第27条第7項）。
- 7) 現行のオアハカ州民法第143条は、「婚姻とは種を永続させ、かつ、互いに扶け合って生活するため結合する一人の男性と一人の女性との間で結ばれる民事契約」(contrato civil celebrado entre un solo hombre y una sola mujer, que se unen para perpetuar la especie y proporcionarse ayuda mutua en la vida) と規定する。カトリック教会の伝統的な結婚観を色濃く反映した文言である。新しい条文では、性別および種の永続に関する表記がなくなり、つぎのように改められる：「共同で生活を営み、かつ、互いに尊重し、同等の権利を有し、扶け合うため結合する二人の人間の間で結ばれる民事契約」(contrato civil celebrado entre dos personas, que se unen para realizar una vida en común y proporcionarse respeto, igualdad y ayuda mutua) (Istmo Press, 2019 [2])。〔拙訳、下線筆者〕

【参考文献】

- 青砥清一。2019。「イベロアメリカにおけるマイノリティーの権利 ー同性婚は認められるべきか？ー」、『グローバル・コミュニケーション研究』第7号、神戸外語大学グローバル・コミュニケーション研究所、pp.63-72。
- 青砥清一・相澤正雄（編・共訳）。2019。『七部法典 第III巻 第五・六・七部』、日比谷出版社。
- 日本カトリック司教協議会（監修）、新要理審編纂特別委員会（編著）。2011。『カトリック教会の教え』、カトリック中央協議会。

- Animal Político. 2017. *Cómo es que la tradición muxe se ve amenazada por el actual discurso LGBT*. 2017 年 2 月 3 日掲載.
<https://www.animalpolitico.com/2017/02/la-tradicion-muxe-se-ve-amenazada-actual-discurso-lgbt-2/> (2018 年 8 月 18 日閲覧)
- Bennholdt-Thomsen, Veronika (著)、加藤耀子・五十嵐落子・入谷幸江・浅岡泰子 (訳). 1996. 『メキシコの母系制社会 女の町フチタン』、藤原書店.
- CNN.co.jp. 2018. 「ローマ法王、同性愛男性に「神があなたをそのようにつくった」」. 2018 年 5 月 22 日掲載.
<https://www.cnn.co.jp/world/35119558.html> (2019 年 8 月 15 日閲覧)
- Gobierno de México. 2019. *Elvis Guerra, poeta y artesano muxe que sacude la tradición*. 2019 年 3 月 17 日掲載.
<https://www.gob.mx/cultura/prensa/elvis-guerra-poeta-y-artesano-muxe-que-sacude-la-tradicion?state=published> (2019 年 8 月 16 日閲覧)
- Gómez Regalado, Amaranta. 2016. *Guendaranadxii; la comunidad Muxhe del istmo de Tehuantepec y las relaciones erótico afectivas*, Tesis doctoral, Facultad de Antropología, Universidad Veracruzana.
- Istmo PRESS. 2019 [1]. *En Juchitán se respeta el matrimonio igualitario: Emilio Montero*. 2019 年 7 月 12 日掲載.
<http://www.istmopress.com.mx/municipales/en-juchitan-se-respeta-el-matrimonio-igualitario-emilio-montero/> (2019 年 8 月 16 日閲覧)
- Istmo PRESS. 2019 [2]. *Oaxaca aprueba matrimonios igualitarios*. 2019 年 8 月 28 日掲載.
<http://www.istmopress.com.mx/oaxaca/oaxaca-aprueba-matrimonios-igualitarios/> (2019 年 8 月 31 日閲覧)
- Mirandé, Alfredo. 2017. *Behind The Mask: Gender Hybridity in a Zapotec Community*, The University of Arizona Press.
- OECD. 2019. *Society at a Glance 2019*. 2019 年 3 月 27 日掲載.
https://www.oecd-ilibrary.org/social-issues-migration-health/society-at-a-glance-2019_soc_glance-2019-en (2019 年 8 月 28 日閲覧)
- Pickett, Velma B., Black, Cheryl & Marcial Cerqueda, Vicente. 2001. *Gramática popular del Zapoteco del Istmo*. Segunda edición (electrónica).
<http://filosofia.uaq.mx/yaak/fils/zapoteco/gd/grampopularzai.pdf> (2019 年 8 月 28 日閲覧)
- Synowiec, Ola. 2018. *The third gender of southern Mexico*. 2018 年 11 月 26 日掲載.
<http://www.bbc.com/travel/story/20181125-the-third-gender-of-southern-mexico> (2019 年 8 月 28 日閲覧)